

浅川扇状地遺跡群

^み
三 ^わ
輪 遺 跡 (4)

—長野県職員宿舎建設地点—

1993・1

長野市教育委員会

序

長野市域においても上信越自動車道・長野自動車道の供用開始が目前に迫り、それに関連する国道をはじめ各種の公共事業が急ピッチで進展しているところでもあります。また、北陸新幹線・オリンピック関係の事業も基現化しつつあり、民間における宅地造成開発等も活況を呈しつつあります。まさに長野市は、新中核都市・国際都市として生れ変わろうとしています。

しかし、「物の豊かさ」を追求する一方で、土地に刻まれた歴史・埋蔵文化財―が削減の一途をたどっているのが現状であります。開発行為とかげがえのない文化遺産の保護には相矛盾する側面がありますが、両者共存の上に、国民共有の財産であります文化財の保護・保存・公開という「心の豊かさ」を求める声も大きくなっていることも周知のとおりです。また失なわれゆくものを記録に留め、後世に伝えていくのも私達の国民的責務と考えております。

さて、ここに平成4年度において長野県土地開発公社による長野県職員宿舍建設事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました成果を『三輪遺跡(4)』として刊行いたします。調査地は遺跡の破壊が懸念される建物敷部に限定されたものでありましたが、平安時代から中世にかけての重要な遺構遺物を発見しております。

本書が埋蔵文化財の保護に対し一層のご理解と地域文化向上のための一助としていただければ望外の喜びといたします。

最後になりましたが、本書の上梓に至るまでご支援・ご協力をいただいた関係者の皆様へ厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

長野市教育委員会教育長

奥村秀雄

例 言

- 1 本書は、長野県土地開発公社理事長毛漕修と長野市長塚田佐との間で締結した「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した長野県職員宿舍建設事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市三輪3丁目586番地に所在する。
- 3 報告書名を『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡4』とした。浅川扇状地扇央部下位の遺跡の集合体を総称する。(1)は三輪小学校地点、(2)は長野電鉄本郷住宅地点、(3)は国鉄本郷団地地点の発掘調査地を現す。
- 4 発掘調査及び整理は矢口が総括し、記録は各調査員が分担した。整理における調査員の分担は下記の通りである。
[土層実測] 小松安和・横山かよ子 [遺構結線図] 小松安和 [遺構整図] 矢口忠良 [遺構浄書] 笠井敦子 [遺物整理] 向山純子・西尾千枝 [遺物実測・浄書] 矢口栄子 [遺構写真] 小松安和・矢口忠良
- 5 本書では、以下の遺構記号を使用している。SB（住居址）・SK（土坑・堅穴状遺構）・SD（溝址）を現す。
- 6 遺物実測図のうち土師器等土器類の断面は白抜き、須恵器は黒塗り、灰軸陶器は小黑点で、また土器のうち黒色処理されているものを黒点で表示した。
- 7 遺構の測量は、信厚実測図研究所へ委託した。9図の遺構分布図中の実線と数値は、平面直角座標系第Ⅲ系による。遺構図中の水準数値は、日本水準原点からの標高を現す。
- 8 調査で得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略名を「MPD」とした。

目 次

序	
例言・目次	
I 調査経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	2
3 調査の体制	4
II 調査地周辺の環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
3 考古学的環境	10
III 調査	15
1 調査地	15
2 遺構の分布	17
3 遺構と遺物	18
IV 結 語	37
(付) 遺物観察表	38

挿 図 目 次

1 図	地形図及び調査位置図	6
2 図	調査地周辺の浅川扇状地群主要遺跡	9
3 図	三輪遺跡 1 調査位置図、1次調査遺構分布図	11
4 図	三輪遺跡 1 ・ 次調査遺構分布図	12
5 図	三輪遺跡 2 調査地、遺構分布図	13
6 図	三輪遺跡 3 調査位置図・遺構分布図、三輪遺跡 4 調査位置図	14
7 図	調査地と地形図	15
8 図	三輪 3 ・ 4 遺跡遺構分布図	16
9 図	三輪遺跡 4 遺構分布図	17
10 図	1号住居址、5号土壇 S K 5 、8号溝址実測図	18
11 図	1号住居址出土土器実測図	19
12 図	2号住居址位置図・土層実測図	20
13 図	壁穴状遺構、3号土壇、6号溝址実測図	20
14 図	柱穴列実測図	22
15 図	柱穴状実測図	23
16 図	1号・6号土壇実測図	24
17 図	5号土壇出土土器実測図	25
18 図	1号溝址出土遺物実測図	26
19 図	2号溝址土布目瓦拓影図	26
20 図	A地区遺構実測図	27
21 図	7号・9号溝址実測図	29
22 図	7号溝址出土土器実測図	29
23 図	7号溝址出土古銭拓本図	30
24 図	8号溝址出土土器実測図	31
25 図	10号溝址実測図	32
26 図	10号溝址出土土器実測図	33
27 図	五輪塔埋納遺構上部集石・上層実測図	34
28 図	五輪塔埋納遺構五輪部実測図	35
29 図	五輪塔埋納遺構下部実測図	35
30 図	五輪塔実測図	36

I 調査経過

1 調査の事務経過

調査地は、1図で見られるようにもとは日本国有鉄道（国鉄）職員宿舎であったものが国鉄の民営化に伴い、更地にされ長野県に土地所有が移管された地域で、平成2年度発掘調査が実施された国鉄清算事業団本郷団地造成地と僅かな窪地を挟んで西に対峙する。国鉄職員宿舎等の先行した開発行為等により遺物の表面採集はなかつたものの地形から三輪遺跡の範囲にあるものと認識されていた。

この地域の開発事業は、当初長野県警察本部職員宿舎建設の打診があったが、北陸新幹線建設のための用地買収の進展に伴って、長野市篠ノ井に所在する長野県職員宿舎敷地が代替地として求められることとなり、急遽、本地に長野県職員宿舎建設計画が具体化し、それも急を要する事業計画であった。以下、日を追って事務経過を記する。

平成3年12月 長野県土地開発公社等より職員宿舎建設に伴う発掘調査の実施についての依頼があり、急概平成4年度発掘調査費の予算計上を行う。

平成4年1月23日付 長野県土地開発公社理事長毛涯修より文化庁長官宛、文化財保護法第57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出される。

1月31日付 前記書類を長野県教育委員会教育長宛、「発掘調査を実施して記録保存をはかる」旨の意見を付して進達する。

2月21日付 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。長野県土地開発公社理事長宛、「（略）文化庁の指導により発掘調査を行うこととされていますので、工事着手前発掘調査を長野市教育委員会へ委託のうえ実施してください。（略）。長野市教育委員会教育長宛、「長野県土地開発公社理事長毛涯修から通知のありました土木工事等については、別紙写のとおり発掘調査を行うこととしたいので、調査に際しては格別の御配慮をお願いします。」

4月13日付 文化庁長官宛、文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出する。

4月13日付 長野市長塚田佐と長野県土地開発公社理事長毛涯修との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。〔委託業務の名称〕長野地区（三輪）職員宿舎建設事業に伴う平成4年度埋蔵文化財（浅川扇状地遺跡群三輪遺跡）発掘調査委託〔履行期間〕平成4年4月13日～平成4年12月28日〔委託料〕7,000千円

4月13日付 北信土建㈱代表取締役野沢柳一郎と重機等の「賃貸借契約書」を締結する。

4月13日～4月20日 表土除去作業を行う（実質4日）

4月20日～5月22日 発掘調査を実施する（実質調査15日、補足調査3日）。

4月30日付 南写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量「委託契約書」を締結する。

5月25日付 長野中央警察署長宛に「埋蔵文化財拾得について（届出）」、長野県教育委員会教育長宛の「埋蔵文化財保管証」を合せて提出する。

5月25日付 長野県土地開発公社理事長及び長野県教育委員会教育長宛、「発掘調査終了届」を提出する。

10月1日～10月30日 土器洗浄・注記・復元作業を行う。

11月1日～平成5年1月22日遺構整頓・遺物実測・報告書編集作業を行う。

12月1日付 「埋蔵文化財発掘調査にかかわる委託契約の変更について（協議）」を提出する。変更協議事項(1)履行期間「当初」平成4年4月13日～平成4年12月28日「変更」平成4年4月13日～平成5年3月15日「理由」

埋蔵文化財センターにおける事業量の増加による。(2)委託料「当初」7,000千円「変更」3,213千円「理由」住居址等の居住遺構及び遺物の出土量が少なかったため。

12月1日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を締結する。

平成5年3月15日 『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(4)―長野県職員宿舎建設地点―』を刊行する。

2 調査日誌

4月15日 発掘調査機器材の整理・準備作業を行う。

4月17日 発掘調査機器材の搬入、プレハブ・簡易トイレの設置作業を行う。

4月20日(晴) 本日より本格的に発掘作業に入る。宿舎建設地南よりA・B・C地区とし、貯水槽建設地をD地区とする。A地区調査壁の整備、遺構検出作業を実施した後、SD1～3の調査を開始する。

4月21日(晴) SD1～3の調査を継続し、完掘する。SD4・5、SK1・2の調査を開始する。

4月22日(雨) 降雨のため作業を休む。

4月23日(晴) 雨水によりA地区の地盤状態が悪く、午前中B地区の調査壁の整備を行う。SD4・5、SK2・4を完掘する。SD6、SK3の調査を開始し、完掘する。

4月24日(晴) A地区遺構精査後写真撮影を行う。B地区の遺構検出作業を実施し、SD7・8、柱穴列の調査を開始する。

4月27日(晴) SD7、柱穴列の完掘後写真撮影を行う。SD8の調査を継続し、北西隅部に住居形態遺構(SB1)を確認。更にSB1内に炭化物を多量に含む土塊(SK5)がある模様。

4月28日(晴) SD7以西に自然流路と思われる大溝(SD9)の存在が予想され、北壁に添って巾2mのトレンチを設定する。SD8、SK5、SB1の完掘後写真撮影をする。C地区の調査北壁を整備する。

4月30日(曇) 昨夜来の降雨にて作業中止。A・B地区の北壁土層実測を開始する。

5月1日(晴) SD9の調査を継続する。C地区の調査壁の整備、遺構検出作業後、ピット群の調査を開始する。遺構測量及び土層実測作業を行う。

5月6日(晴) SD9、ピット群の調査を継続する。

5月7日(曇) SD9・ピット群の完掘後写真撮影を行う。C地区大溝(SD10)調査を開始する。D地区



I-1 4月21日



I-2 4月28日

の遺構検出作業を実施するも確が多く遺構の存在は確認されない。

5月8日(曇) SD10は幅が広く、深い線相を呈していたので、時間的制約から4分割し、落ち込みが明瞭な南西部を集中調査することにした。

5月11日(晴) SD10の調査を進める。上層からの出土遺物が多い。

5月12日(晴) SD10の調査を継続する。

5月13日(曇) SD10の調査を進める。溝底確認のため南北にトレンチを設定する。

5月14日(曇) SD10の南西部をほぼ完掘する。

5月15日(晴) SD10の精査後写真撮影する。五輪塔埋納遺構を発見し、露出に全力を上げ、上部覆土を検出後写真撮影・土層実測を行う。本日で発掘作業を終了する。

5月18日～22日 五輪塔埋納遺構の実測・写真撮影を行い、現地に於る作業を全て完了する。



1-3 5月1日



1-4 5月13日



1-5 発掘調査参加者

3 調査の体制

センターの直轄事業として実施し、平成4年度の組織及び業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄

総括責任者 長野市埋蔵文化財センター所長 小山 正

庶務担当 所長補佐 山中武徳(契約・出納事務・庶務担当)

職員 青木厚子()

調査担当 調査係長 矢口忠良(三輪遺跡(4)・田牧居婦遺跡・猪ノ平遺跡・宮下遺跡・芹田東沖遺跡・松原遺跡(市道松代東111号線)担当)

主査 青木和明(篠ノ井遺跡群(市道塩崎中央線)・石川条里遺跡(北野土地地区画整理事業他)(北野土地地区画事業内都市計画道路)(みこと川団地)(県道長野信州新線)(上見林遺跡)担当)

主事 千野 浩(流人塚遺跡・藁川原遺跡・駒沢新町遺跡(2)・本村東沖遺跡・岩崎遺跡)
飯島哲也(松原遺跡(市道松代東63号線)(県道中野更埴線)・藁川原遺跡・分布試掘調査担当)

専門主事 小林安和(三輪遺跡(4)・駒沢新町遺跡(2)・松原遺跡(県道中野更埴線)担当)

羽場卓雄(篠ノ井遺跡群(市道塩崎中央線)・石川条里遺跡(北野土地地区画整理事業他)・松原遺跡(県道中野更埴線)担当)

太田重成(流人塚遺跡・田牧居婦遺跡・猪ノ平遺跡・宮下遺跡・松原遺跡(県道中野更埴線)担当)

専門員 中殿章子(松原遺跡(県道中野更埴線)・芹田東沖遺跡担当)

横山かよ子(三輪遺跡(4)・駒沢新町遺跡(2)・本村東沖遺跡・石川条里遺跡(県道長野信州新線)担当)

寺島孝典(田牧居婦遺跡・篠ノ井遺跡群(市道塩崎中央線)・石川条里遺跡(北野土地地区画整理事業他)(みこと川団地)・藁川原遺跡担当)

笠井敦子(流人塚遺跡・田牧居婦遺跡・猪ノ平遺跡・宮下遺跡・三輪遺跡(4)・岩崎遺跡担当)

山崎佐織(松原遺跡(県道中野更埴線)(市道松代東111号線)・藁川原遺跡担当)

山田美弥子(松原遺跡(県道中野更埴線)(市道松代東63号線)担当)

三輪遺跡(4)における参加者

調査員 矢口栄子

調査作業員 桜井修白・斉藤孝作・木内敬治・金子徳太郎・金子弥平・北沢俊三・春原好人・小林キサ子・小林こまよ・小林養子・小松木喜子・脇坂智子・宮原孝子・池田賢二・向山純子・西尾千枝・小林三郎・橋爪孝次

整理作業員 向山純子・西尾千枝 (以上順不同・敬称略)

以上の皆様の他に、長野県教育委員会文化課小池幸雄、長野県職員課森田邦雄、長野県土地開発公社金井公雄、長野県住宅供給公社清水雅夫、北信土地開発野沢敏各氏からは公私に亘るご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。

II 調査地周辺の環境

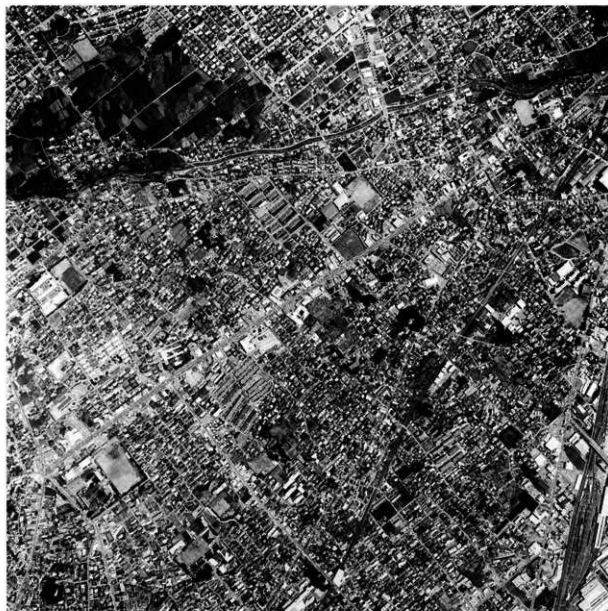
和田 博（長野市立博物館専門員）

1 地理的環境

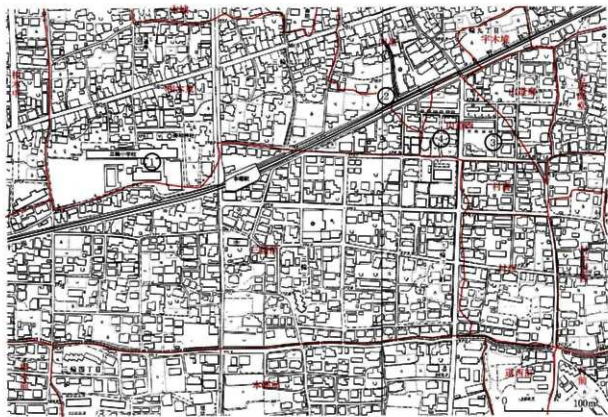
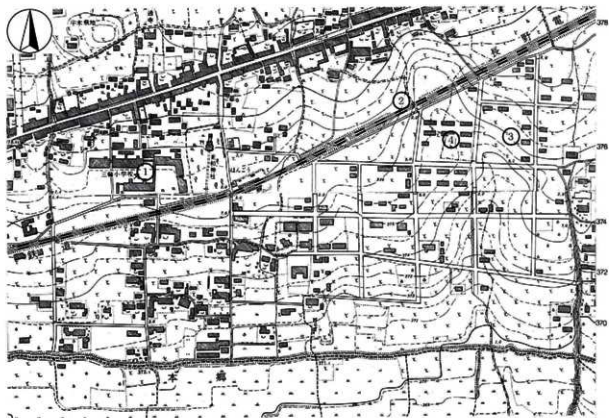
標高300～350mの低平な長野盆地（善光寺平）は、千曲川を本流として犀川その他の諸河川を合流し、西南から東北に向けて長軸約40km、横幅の最も広い部分で約10kmに及ぶ紡錘状に展開する。

盆地以東は、上信越国立公園を形成する三国山脈で火成岩を主体とした急峻な山容を示し、山脚部はリアス式海岸状の出入に富み、おぼれ谷相当部には扇状地や岩盤が発達している。

これに比して盆地以西は、標高700～800mの切崖面を形成する中新統以降の若い堆積層を主としており、地層



II-1 調査地周辺の航空写真



1 図 地形図及び調査位置図 (上) 大正14年測量・昭和27年修正図 (下) 昭和49・50年測量・昭和57年修正図

1.三輪小学校地点 2.本郷住宅地点 3.本郷団地地点 4.長野県職員住宅地点

の走向は盆地主軸と並行する。このため、盆地西側の辺縁部は段丘や段層を伴って比較的単調で、一般的に南部で扇状地が優勢に発達し北上するに従って劣勢となり、逆に千曲川以東に発達した扇状地地形を見せる。

このような巨視的形成の中にあつて、飯綱山を水源とする浅川は山間部を浸食流下した後、三登山南麓を限る西条所層とこれに直交する上松所層の接点にあたる浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。扇頂から約2km弱東南流下した浅川は以後天井川となり、さらに約1km程流下した富竹付近で大きく左旋回し、千曲川自然堤防の西側後背湿地帯を東北へ貫流して豊野町に至り、鳥居川と共に千曲川に流入する。

浅川扇状地は、右翼即ち南方部では扇頂から約2km南下した三輪8丁目で城山丘陵を横断した堀切沢が扇状地と城山丘陵との接合部を一部開析しているが、新町-柳町-荒屋を縫合線として湯福・窓花川扇状地に接し、扇端は標高370mの等高線沿いに東流する鍾鐺川用水付近で端末状の段を呈しながら平林-東和田-南堀にまで達して沖積地に移行する。

この扇状地の伏流湧水地帯は、古来桐原七景と呼ばれて親しまれていた湧泉にもうかがわれるように、標高390~370m線の間に帯状に分布し、そこに相ノ木・桐原・送目・吉田さらに稲田・徳間の諸集落が発達し、県道長野野線(旧北国街道、通称相ノ木通り)をはさんで一連の街村を形成している。

湧水地帯下縁を窓花川から導水した前述の鍾鐺川用水が東流する。用水は点在する溜池と共に、それより低位の広い範囲にわたって条里制的遺構を呈する水田地域をうるおしていたが、年を追って水田が姿を消し住宅や事業所が立ち並びつゝある。

2 歴史的環境

大正14年(1925)作製の地籍図によると、本遺跡に南隣して東西に長い「三諸前」の地字が西方に広がり、さらにその南方に「神境」もある。「三諸」はサンジョと呼ばれているらしいが、本来は「神のいる所で、多くは三輪山を指す」『古語辞典』とされるミモロと考えられ、出雲の美和旗奉斎神とされる祭神・神社名ともに大和の大神社に同じ美和神社の神域が北側にある。

この神社は延喜式神名帳に記載された水内9社の筆頭に列する式内社で、記録上の初見は貞観8年(866)2月7日の条に、「三和・神部両神に兵疾の災を防ぐため国師・講師に奉幣読経させた。」(『三代実録』意訳)とある。神部(ミワノベ)神はおそらく三和神とならび祀られていた神であろうとされている。また同書の貞観3年(861)に「二月七日辛亥授信濃国正六位上国業比売神従ろうと五位下(上下路)」とある神は、現在美和神社の相殿に祀られており、記録から見ても古くからの美和神社鎮座がうかがわれる。

この神域西に隣接する三輪小学校の校地は昭和50年から3次にわたって発掘調査され、弥生後期~平安時代の遺跡が確認されている。東には昭和61年に調査した平安時代を主とした三輪遺跡2がある。

古い一筋の道がこのような古来からの山嶺をもつ神社前から本遺跡南を経て東方約800m地点にある桐原神社前にうねうねと通じている。延喜古道もほゞこれにそって、桐原神社付近さらに旧稲積村地籍から北上して三才の多古駅家跡へ向ったと考えられている。吉田大銀杏のある地籍は、以前は吉田大宮(現在吉田上町鎮座)の故地で皇足徳命を祭神とし式内社にも比定されている。この故地は飯綱山をはるかに望む湧泉地で古代祭祀に好適な所でもある。

桐原神社付近は牧野(まきの)地籍で、『北山抄』に「応和元年(961)十一月四日召桐原駒廿定於南庭覽之云々」とある後院領桐原牧は、この桐原中心の牧場を指し、これが文治2年(1186)の「乃貫末済庄々」にみえ

る吉田牧になったとも言われ、宇木（牛牧の略）・駒弓社・駒沢・三才の地名のほか、桐原牧神社の舊駒神社も旧牧場の名残とされる。

同神社東側に昭和30年ごろまで「ほりうらの畑」と呼ばれる水田に囲まれて一段高い耕地があり、『長野県町村誌』には高野氏古城跡と記されている。こゝは応永11年（1404）の市川氏軍忠状に「大將細川兵庫助殿典群御発向時桐原若親下芋河之要害責落云々」とある桐原城（桐原牧神社付近）で、当時これら諸地域は中野を本拠とする高梨氏の傘下にあった。『諏訪御布礼之古書』には文明3年（1471）の明年御射山祭頭役にて「桐原惟宗忠国御花札五貫六百元」と見えている。また同書の長享元年（1487）の条には「宇木小井桐原小鹿野長嶋五ヶ村而頭本打替々々勤申候（上下略）」ともあり、当時宇木は原謙宗、小鹿野（押鐘）は原真高の領有が同条で知られる。宇木城（2図11）は本道跡北約1km余の盛伝寺地籍、小井（越）は約1.5km東の中越、押鐘は東北約700m、SBC東南隣にそれぞれあり、押鐘城（12）は現在も遺構を残している。長嶋は不明であるが逃日あたりの古名とする説もある。

これらの居館跡以外に本道跡西北200mの長野女子高校建設以前には土塁等の明瞭な遺構があり、相ノ木氏居館跡（13）と呼ばれるが、一説には浅川の氾濫で宇木城がこゝへ移ったとする人もある。さらに南約1kmの田国鉄工場敷地には善光寺奉行も勤めた原有源の平林城（15）があるなど、本道跡を囲む一帯にはいわゆる小名と呼ばれる中世地方武力の本拠が数多い。

これら弱小武士達は時には高梨氏に併呑され、或いは太田庄を本拠とする島津氏の襲食を受けたり、互に協力合力して所領確保に努めたりもした。このように考えるとき応永7年（1400）の大塔合戦において、北信の大勢が反守護軍にまわる中において、宇木・中越氏らが小笠原守護軍に投じた悲劇がうかがわれる。

中世武士達の争乱は天文22年（1553）に始まる川中島の戦いでその極に達する。12年間に及ぶ甲越対戦の間、謙信は信濃に出撃するたびに横山城（14）を拠点とした。これが本道跡西約1kmにある城山丘陵上にあった平山城で、約50m余の比高差をもって平地部に臨んでいる。横山城の本郭跡は、現在そこに祭祀されている水内大社は近世末まで善光寺本堂に接して社殿のあった年神堂で、延喜式にある水内郡の名神社大社健御名方富命神彦別神社はこの神とされている。なお城山は仮寝ヶ丘とも呼ばれていた。

乱脈だった地域情勢も統一されて近世になると、松平忠輝が松代から越後に移封になった翌年慶長16年（1611）に江戸〜福島城（直江津）を結ぶ動脈として、それまでの長沼〜松代通りにかわって善光寺経由が北国往還となった。これによって通路が整備され横山・吉田間は在来古道より上部に直線的な最短路が開設され、散在していた周辺の集落は新しい街道沿いに集められ、吉田には口留番所がおかれ、横山には一里塚が設けられた。

以後、近世を通じて加賀藩主をはじめ北陸諸大名の参勤交代や佐渡金山からの金銀運搬の重要路となると共に、庶民の生活物資の輸送や善光寺参りの旅人などで賑わった。

なおこの三輪地域は、近世初頭に一部地域の善光寺領時代があったものの、近世を通じて善光寺領に接する松代領であった。明治以降は数次にわたる合併を経て大正12年に長野市に併合して今日に至っている。

（参考文献）『上水内郡地質誌』『上水内郡誌自然篇・歴史篇』『豊野団研連絡紙』30』『信濃史料』『長野市史』『長野県町村誌』『長野県の地名』『長野県史』



2 図 調査地周辺の浅川扇状地群主要遺跡

- 1 押鐘遺跡 2 本村東沖遺跡 3 下宇木遺跡 4 美和公園遺跡 5 下宇木B遺跡 6 三輪遺跡(1) 7 三輪遺跡(2)
 8 三輪遺跡(3) 9 三輪遺跡(4) 10 旭幼稚園遺跡 11 宇木城跡 12 押鐘城跡 13 相ノ木居館跡 14 横山城跡 15 平林城跡

3 考古学的環境

調査地一帯は、市街化しているため遺跡の範囲を画することは困難に近い。このため過去に於る遺物の確認地及び地形を考慮して広域の浅川扇状地遺跡群（2図）として周知されている。この中から本書所収の三輪遺跡を除き、発掘調査等実施されたものを主要遺跡とする。これらは遺跡内の部分的な調査であり、遺跡内に於る性格的位置やその広がりは不明である。またこの地域は前節で記述した通り小豪族が割拠した地でもあり、多くの中世遺跡が確認されている点特色がある。

1 押鐘遺跡 平成2年度発掘調査を実施した。弥生時代後期から中世にかけての遺物が出土していたが、調査面積が330㎡程であったため、平安時代を主とする住居址1軒、溝跡1ヶ所、土塚6基を検出したにすぎない。遺物中の青磁碗は、宇木城跡との関連で注目される。長野市教委『中俣遺跡・押鐘遺跡・塚田遺跡』平成3年

2 本村東沖遺跡 平成3年度発掘調査を実施した。調査面積6800㎡から住居址総数117軒（弥生時代中期3軒・後期43軒、古墳時代中期63軒、平安時代5軒、不明3軒）と17基の土塚を検出した。特に善光寺平において古墳時代中期の集落址の調査例は極めて少なく、出現期のカマド・間仕切り溝・ベット状施設をそなえた住居址が多く見られ、また古式須恵器が多く伴うなど様々な新知見を得た。出土遺物には滑石製土持勾玉、石製模造品・同未成品、土鈴等があり、祭祀的性格も強い。また地附山前方後円墳築造の母胎的村落とも考えられる。平成4年度報告書刊行予定である。長野市埋文センター『所報い。3』平成4年

3 下宇木遺跡 平成2年度発掘調査を実施した。弥生時代後期住居址6軒、古墳時代前期1軒・中期1軒・後期9軒、土塚3基、ピット群を検出した。特に弥生時代から古墳時代中期にかけてのものは前述した本村東沖遺跡との関連性がうかがわれる。長野市教委『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡3』平成3年

4 美和公園遺跡 昭和58年度長野市遺跡調査会により発掘調査を実施した。古墳時代中期住居址1軒、直径25cmの柱根が残存し、大形建物址を予想させるピット2個が検出された。建物址の規模・性格は不明である。

5 下宇木B遺跡 昭和43年上水道工事中発見され、長野吉田高校地歴班が調査した。遺構は方形周溝墓との判断が示されているが、不明な点が多い。古墳時代前期の1括土器群が採集されている。器高50cm、底部に小円孔が穿たれる大形壺・埴・小形丸底形土器・宍形環等の器種がある。笹沢浩「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌8号』昭和45年

10 旭幼稚園遺跡 弥生時代中期末葉に位置する百瀬式併行土器を出土していることで著名な遺跡である。壺・甕・高環などの器種がある。いずれも文様が単純・退化の傾向にあり、赤色塗彩土器が増加してくる特色がある。上水内郡誌編集会『上水内郡誌歴史篇』昭和51年

11 宇木城跡 別称盛伝寺居館跡とも呼ばれ、盛伝寺伝によれば天正年間に多田氏の居館跡に寺を建立したという。108m×91mの連郭式であったとされるが現在は消滅している。

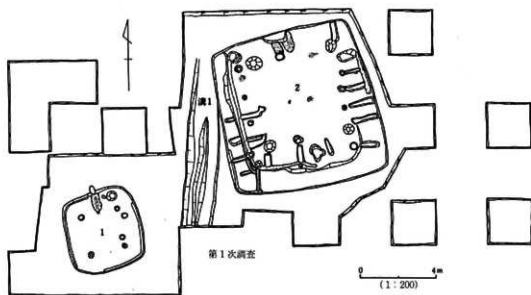
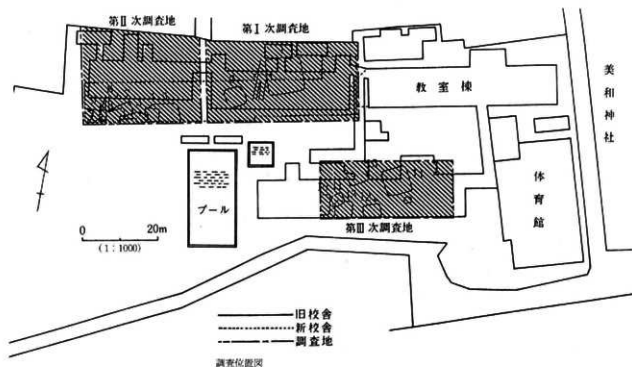
12 押鐘城跡 140m×130mの複郭式を呈し、押鐘氏の居城と推定されるが、多田氏が盛伝寺居館から移転したものと説もある。

13 相ノ木氏居館跡 別称相木城跡。86m×70mの回字形を呈する。室町時代の所産と考えられている。

14 横山城跡 規模は110m×65mと推定されるが、土塁・帯郭の一部を残すのみで、城郭形態は不明である。

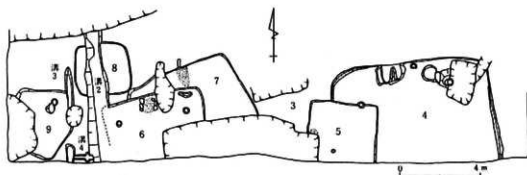
15 平林城跡 110m×100mの規模と推定されるが、城郭形態は不明である。室町時代の所産と考えられる。

（11～15の参考文献は、長野県教育委員会『長野県中世城館跡一分布調査報告書一』による。尚、城館跡名はⅡ章記載のものを用い、参考文献の名称を別称とした。）

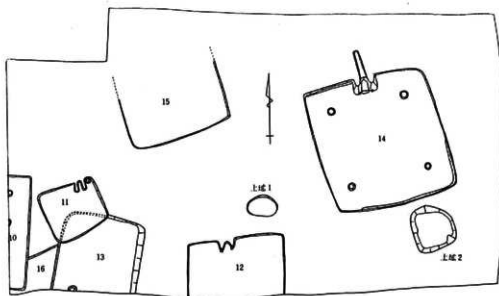


3 図 三輪遺跡Ⅰ調査位置図、1次調査遺構分布図

三輪遺跡 調査地の名称を三輪遺跡(4)とした。それは三輪遺跡が相ノ木から本郷にかけての広い範囲に展開されているものと予想されるからである。昭和41年12月に実施された「新産都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査での分布調査」では、平安時代に比定される土師器・須恵器が長野電鉄線にそって若干ながらも満遍なく表面採集されたと記憶している。その時の調査では東西範囲が推定されたものの南北は不明である。そして早くから市街化が進み、地形の変貌と相まって遺跡範囲の確定を困難にしている。そのため三輪在住の郷土史家霜田蔵氏の提唱する「三輪遺跡」を探ることにする。尚、南北の範囲が明確でないので浅川扇状地遺跡群を冠することにした。(参考文献) 霜田蔵「新産都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査報告(長野市)」「長野12号」昭和42年



第Ⅱ次調査



第Ⅲ次調査

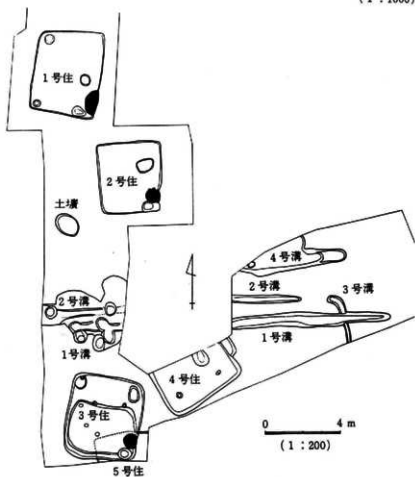
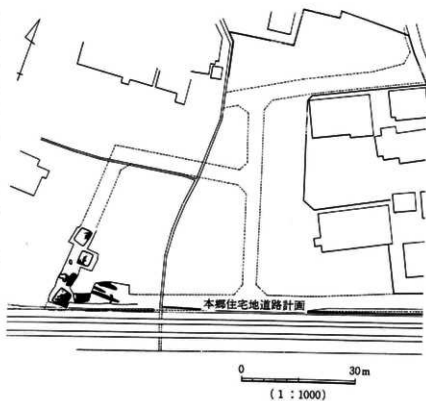
4図 三輪遺跡(1) Ⅱ・Ⅲ次調査遺構分布図

6三輪遺跡－三輪小学校校地点－ 発掘調査は三輪小学校老朽校舎改築事業に伴い、昭和50・51・54年度の3次に亘って長野市遺跡調査会により実施された。弥生時代後期住居址2軒をはじめ古墳時代後期を主体に総住居址敷14軒、溝址3ヶ所、土壇2基が検出されている。そのうち2号住居址は焼失住居で、上屋構造を知る上での考察資料として重要である。主軸11.8m×東西軸9.7mの大形住居址で、平出遺跡11号住居址に次ぐ県下で2番目の規模である。首長者層の住居か、遺物の中で高塚が多いことから祭祀を伴う公共施設とも考えられている。長野市教委『三輪遺跡－三輪小学校校地点遺跡第1～3次調査報告－』昭和55年

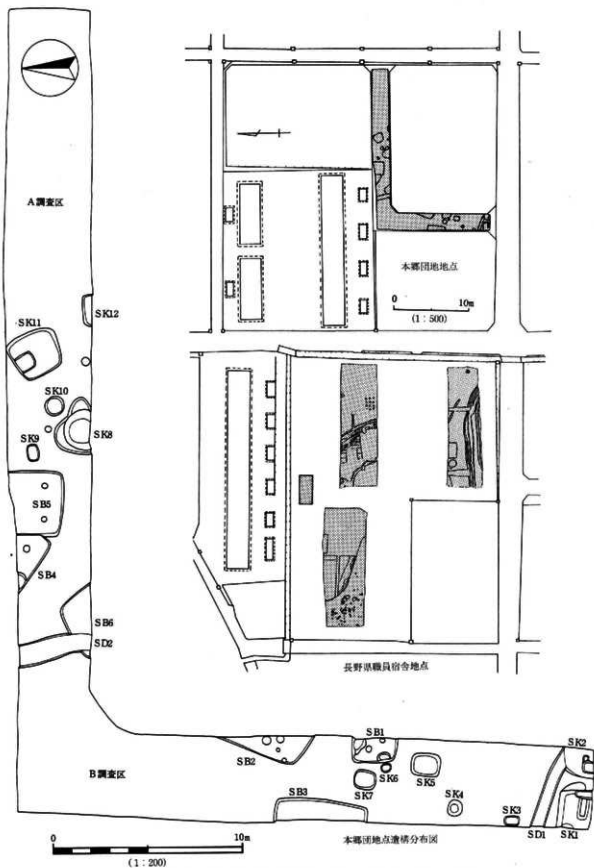
7三輪遺跡(2) 昭和61年度に長野電鉄㈱による本郷住宅造成地を長野市遺跡調査会により発掘調査された。調査面積は約200㎡の狭い範囲であったが、古墳時代後期住居址1軒、平安時代住居址4軒、溝址4ヶ所を検出した。特に平安時代のものの中には、中世の「カワラケ」の原形を見い出せる土器群があり、遺構とともに11世紀代を代表する好資料が出土している。長野市教委『三輪遺跡(2)－本郷住宅地地点－』昭和62年

8三輪遺跡(3) 平成2年度に日本国有鉄道清算事業団による本郷団地宅地造成事業に伴い発掘調査を実施した。調査面積は320㎡程のものであったが、弥生時代住居址2軒、古墳時代前期住居址1軒・後期土壇1基、平安時代住居址3軒・土壇6基・溝址2ヶ所、中世の土壇5基を検出した。遺構の分布は、平安時代では微高地南西縁斜面に展開し、微高地上には弥生時代から、中世の遺構が主体になるような様相がうかがえた。この調査の結果で

は、弥生時代後期の遺構が再出現し、浅川扇状地遺跡群内に小規模な集落が点在することを示唆しているように思える。また中世の遺構・遺物にも注目すべきものがある。土城出土のもの土器皿は13世紀代に比定され、量は少ないものの中世土器編年上好資料であり、また13世紀代の熊泉窯産と認定される青磁碗・香炉片及び輸入品の所謂「口はげ」白磁碗の出土は、近隣の中世居館跡との関係をうかがわせる。



5図 三輪道跡(2)調査地、遺構分布図

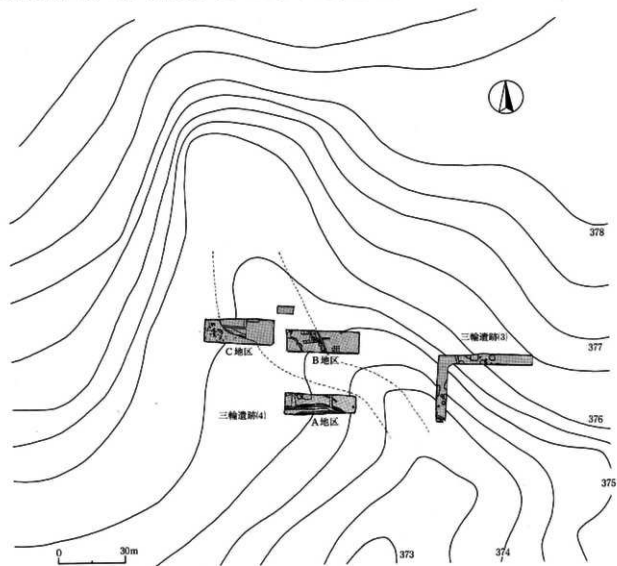


6 図 三輪遺跡3)調査位置図・遺構分布図、三輪遺跡4)調査位置図

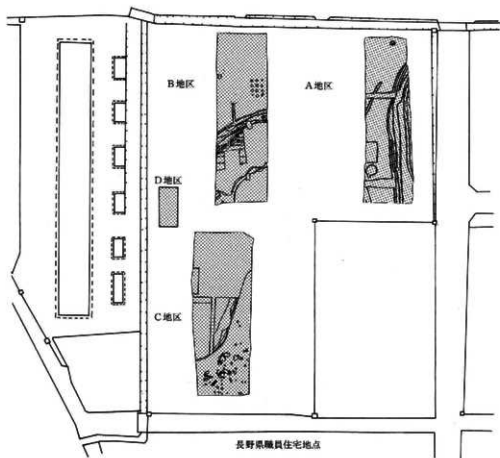
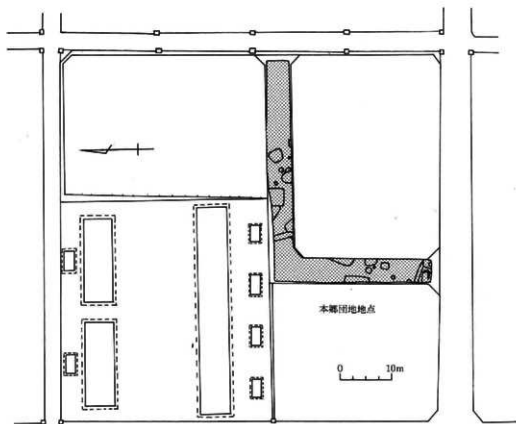
Ⅲ 調 査

1 調 査 地

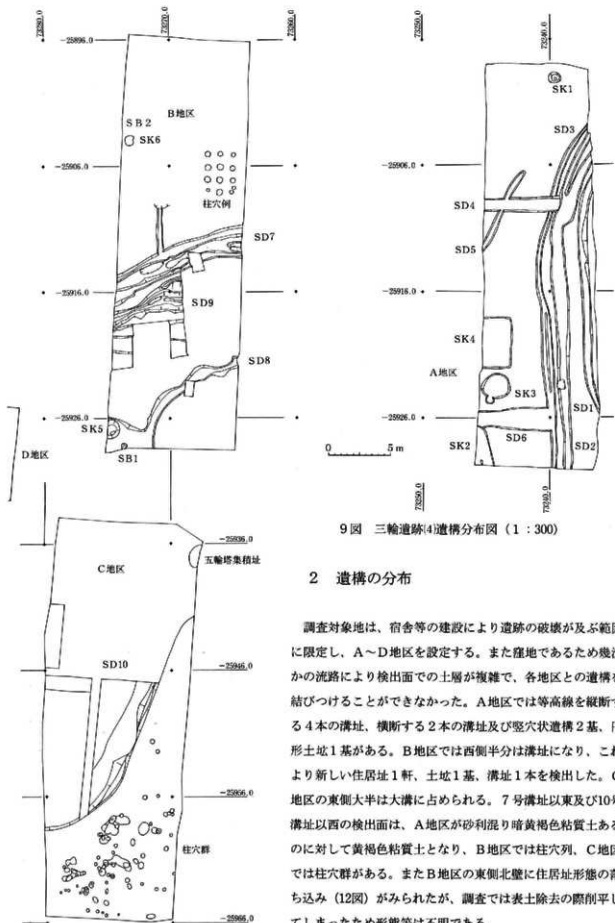
三輪遺跡(4)の調査地は、標高374.5mから375.5mの範囲にあり、大正14年測量図(1図上)と重ね合わせるると南東傾斜面に位置する。また微高地間の谷筋状窪地にあることがわかる。即ち、三輪遺跡(3)が東側微高地南西斜面に展開するのに対し、三輪遺跡(4)は窪地から西側微高地先端にかけての調査地である。そのため検出遺構等にもその特色が現われている。前者が弥生時代後期から中世にかけての居住城であったのに対し、後者には平安時代以降の溝址が目立ち、居住性のある遺構は少ない点を上げることができる。B地区とC地区わたる大溝(10号溝址・7図点線部)の存在は遺跡地形を分離し、居住域を分ける。三輪遺跡(4)の主体的居住域は、A地区及びC地区西側の遺構の分布から、これより西の微高地上に求められる。B地区東側半分は、地形的に三輪遺跡(3)の範囲に入るが、遺跡の性格・内容が異なるものではないものと考えられる。



7図 調査地と地形図 (約 1 : 5000)



8 图 三輪(3)・(4)遺跡遺構分布図(約1.4 : 1000)



9図 三輪遺跡14遺構分布図 (1:300)

2 遺構の分布

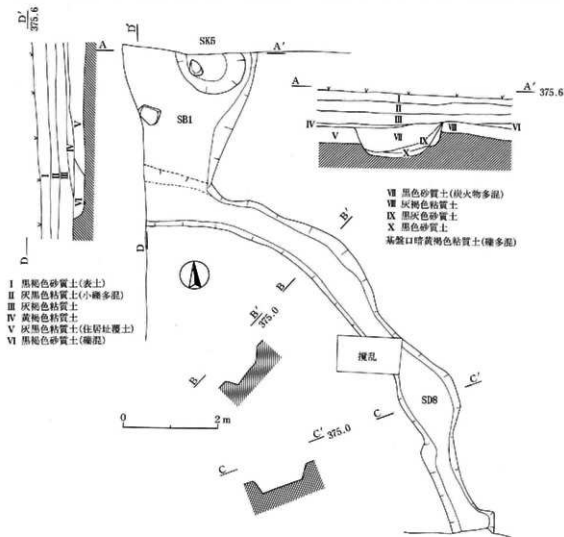
調査対象地は、宿舍等の建設により遺跡の破壊が及ぶ範囲に限定し、A～D地区を設定する。また窪地であるため幾流かの流路により検出面での土層が複雑で、各地区との遺構を結びつけることができなかつた。A地区では等高線を縦断する4本の溝址、横断する2本の溝址及びび窪穴状遺構2基、円形土壇1基がある。B地区では西側半分は溝址になり、これより新しい住居址1軒、土壇1基、溝址1本を検出した。C地区の東側大半は大溝に占められる。7号溝址以東及び10号溝址以西の検出面は、A地区が砂利混り暗黄褐色粘質土あるのに対して黄褐色粘質土となり、B地区では柱穴列、C地区では柱穴群がある。またB地区の東側北壁に住居址形態の落ち込み(12厨)がみられたが、調査では表土除去の際削平してしまったため形態等は不明である。

3 遺構と遺物

1号住居址 (10図、Ⅲ-1・6、11図)

遺構 B地区の北西隅に位置し、東壁の1部を検出したにすぎない。5号土坑・8号溝址と重複関係にあり、土層の観察からこれらよりも先行する遺構と考えられる。形態は南壁が8号溝址内にあるものと推定され、東壁の北端が幾分内湾気味である点に注目すれば隅丸方形が予想される。この推論が正しければ一辺4m前後の住居址になる。東壁の掘込みは、小円礫を多く含む灰褐色粘質土層からで、炭化物を含む黒色粘質土を覆土とし、深さ31cm程になる。底面は小円礫が露出し、若干の凸凹はあるもののほぼ平坦である。カマド・柱穴等の住居施設は確認されなかったが、底面上に上面が偏平になる様な状態で長軸50cm程の自然礫が据え置かれていた。作業台用の石と考えられる。遺物は検出面全体より出土しているが、当初6号土坑が内包していることがわからず調査を進めたため遺物が混合している恐れがある。

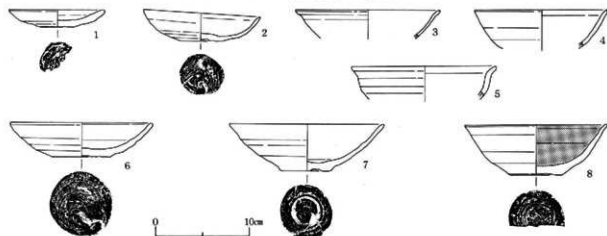
遺物 土器は他の遺構より比較的多く出土しているが、そのほとんどが破片出土で、坏類を主体としている。器種には、弥生時代後期の甕・壺片が数点あり、また須恵器杯・甕片が混入しているほか、住居址に付属するも



10図 1号住居址、5号土坑 (SK5)、8号溝址実測図 (1:80)



III-1 1号住居址、5号土坑



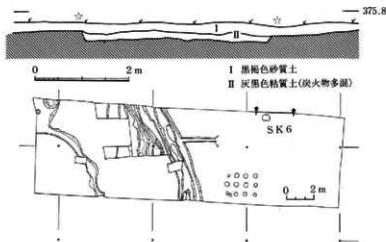
11図 1号住居址出土土器実測図 (1:4)

のとして土師器環(11図)・碗・羽釜がある。環は、口縁部に比べ器高の低い小皿形(1)・やや大振り皿形(2・3・6・7)と体部が内湾度が強く直線的に立ち上がるもの(4・5・8)に大別される。口縁部形態も諸々あり、体部から素直に作り出されるもの(1・6)・大きく外反するもの(3・5・8)と中間形態のもの(4・7)がある。底部外面には糸による切痕(糸切痕)を、体部内外面ともロクロ調整痕を残すものが多い中で、7・8の内面にはヘラミガキ様の調整がなされ、更に8は暗黒褐色を呈しており黒色処理された可能性が高い。また7の底部外面外縁にはヘラケズリが施さされる。1は器内の厚い「カララケ」的要素を持ち、糸切痕等が粗雑である点を考慮すれば、5号土坑に付属するものと考えられる。碗には三ヶ月高台が付される。羽釜は、8号溝址から出土しているもの(24図14)と同じ個体と推定され、本遺構に伴うものと考えられる。

2号住居址 (12図)

遺構 B調査区東側より土層観察の際発見した遺構で、覆土が炭化物を多く含む灰黒色砂質土となり、1号住

居址のあり方と似ていたので一応住居址として取り扱う。表土下18cm前後と浅い位置にあり、表土除去作業の際調査対象地域内を削平してしまったため、形態・規模等は不明である。ただ北壁断面に残され土層からは、長さ約4m・西壁の掘り込みが22cmと計測される。床面は凸凹があり、住居址中央付近が幾分高まる。床面の状態は軟弱である。南に接近する6号土坑(SK6)の覆土も2号住居址と近似していることから本遺構の付属施設の可能性もある。遺物の出土はない。

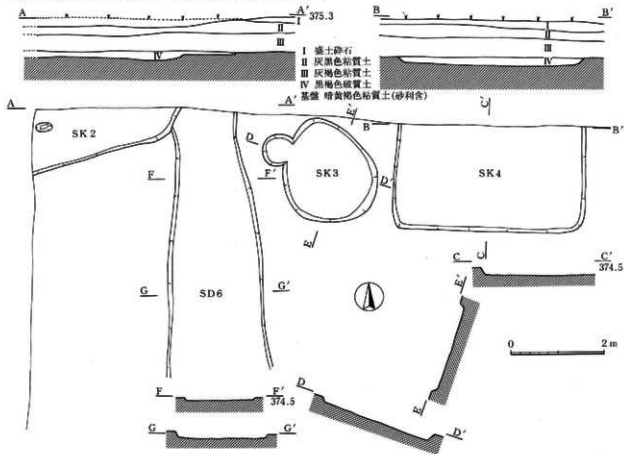


12図 2号住居址位置図・土層実測図(1:80)

2号壁穴状遺構〔SK2〕(13図)

遺構 A地区の北西隅部より南壁及び東壁の一部を検出したにすぎない。形態は東壁が丸味を帯びて大きな角度で外反するが、隅丸方形と予想する。規模は不明である。東壁の掘り込みは、6号溝址と重複しているため定かではないが、傾斜を有する13cm前後になるものと思われる。床面は中央部付近がやや高くなり、壁際は浅い溝状を呈する。カマド等の居住施設は確認されないが、西寄りから長軸35cm、深さ12cm程のビットが1個検出された。覆土は黒褐色砂質土で若干の炭化物が確認されていることから住居址の可能性もある。

遺物 出土量は少なく、破片出土であり、実測復元できる個体はない。器種には、古墳時代の甕把手及び平安時代に比定される土師器杯・須恵器甕があるにすぎない。



13図 壁穴状遺構〔SK2・4〕、3号土坑〔SK3〕、6号溝址実測図(1:80)

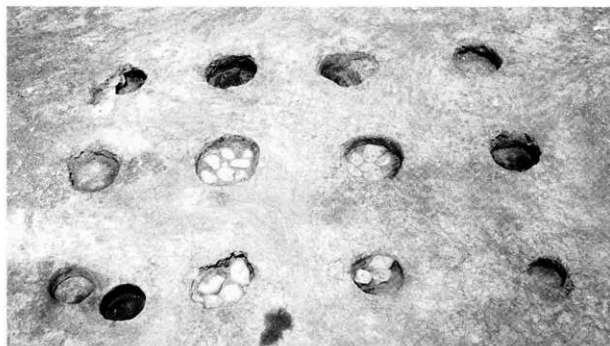
4号竪穴状遺構〔SK4〕(13図、Ⅲ-2)

遺構 A地区の中央付近に位置し、遺構の南側半分程を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、東西壁間4.1mの規模になる。掘り込みは浅く、東壁12cm・西壁11cm・南壁14cmを測る。床面は軟弱で、幾分東に傾斜する。砂利混り暗黄褐色粘質土層を掘り込み、覆土は1号竪穴状遺構と同様の黒褐色砂質土であるが、砂利を多く含み、炭化物が認められない等の相違点がある。カマド・柱穴等は確認されない。土器片等の出土も少なく、居住施設としての使用の可能性はないものと思われる。

遺物 土師器坏片が数点出土しているだけで、それも小破片である。



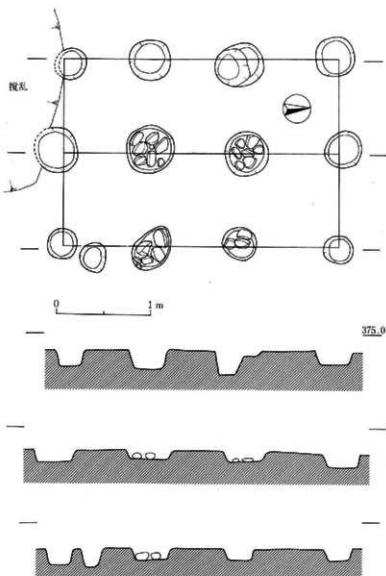
Ⅲ-2 4号竪穴状遺構〔SK4〕・3号土壇〔SK3〕



Ⅲ-3 住穴列

柱穴列 (14図、III-3)

遺構 B地区の東側中央付近に位置する。7号溝址より東の遺構検出土層は黄褐色粘質土で、表土下より確認され、覆土が黒褐色砂質土であるため明瞭に落ち込みが判断できた。柱穴は南北3間・東西2間の規模で、南北3列・東西4列に並ぶ。南北3m・東西2mを測り、各柱穴中心間は1mとほぼ等間隔である。柱穴の形態は、円形を基本とし、直径35～50cmの範囲にあり比較的規格性を有する。検出面が若干南傾斜であるのにもかかわらず南側の方が北側にあるものよりも深い傾向があり、また東寄り2列の中央4個は底面に配石がなされ、掘り込みが他のものより浅い。ちなみに前者が13cm～30cmとばらつきがあるのに対し、後者は10cm内外になる。小屋組の想定であるが、外周のものを掘立支柱穴とするならば、中央列の中2個は床板を支える保持柱用の掘り込みであろう。ただ配石を伴う柱穴が4個方形配列になるのが気になる。これをもって主



14図 柱穴列実測図 (1:40)

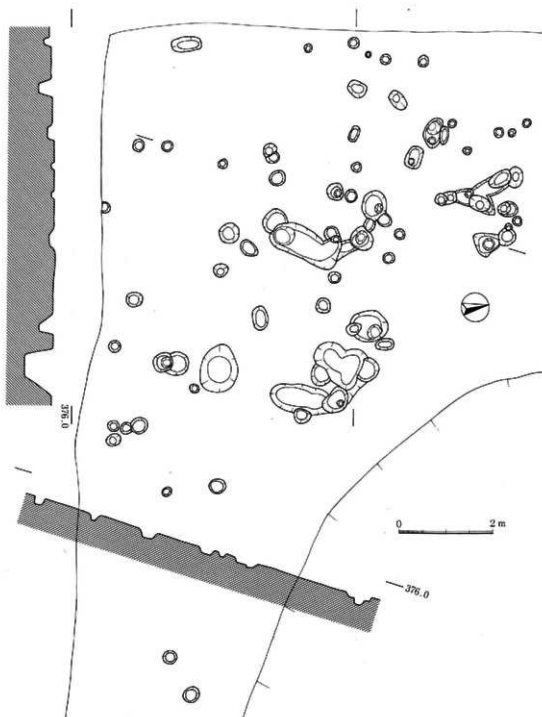


III-4 柱穴群

柱穴とすれば一辺1mの小規模な建物が予想され、他は外屋構築柱穴と考えられる。どちらにしても簡素な建物址が推定される場所であるが、遺物の出土がなく構築年代及び用途等の性格も不明である。

柱穴群 (15図、III-4)

遺構 C地区の西側に散在する柱穴様遺構で、10号溝址内には認められなく、この大溝を意識して掘られた可能性が強い。検出面は東側に位置する柱穴列と同質の黄褐色粘土層であり、覆土は黒褐色粘質土である。規模は直径20cm前後のものから長軸1.5mを測る楕円形様を呈する土坑状のものまで様々である。深さも10cm～60cmの範



15図 柱穴群実測図 (1 : 80)

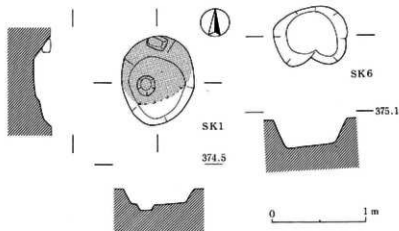
団内にあるもののばらつきがあり一定しない。建物址を想定するところであるが、規格性ある配列は見い出せない。1間×1間または2間×1間程度の小規模なものが時間を置いて数棟建てられた可能性もある。また断面を呈示した柱穴の様に直線配列になるものがあり、櫓状施設の存在も考えられる。

遺物 検出面及び柱穴内より出土した遺物量は少なく、全て小破片で復元実測できる個体はない。器種には、土師器杯・碗類・須恵器甕、灰軸陶器碗があるにすぎない。

1号土坑〔SK1〕(16図、Ⅲ-5)

遺構 A調査区の東端に位置し、最窪地にある遺構である。形態は卵形を呈し、南北95cm・東西78cmの規模になる。掘り込みは2段になり、北側で18cm・南側で10cmを測る。北側の深い部分から北壁にかけ焼土が認められ、覆土は炭化物を多量に含む黒色砂質土であり、何らかの燃焼施設であったとをうかがわせる。

遺物の出土はなく、時代は不明である。



16図 1号・6号土坑 (SK1・6) 実測図 (1:40)



Ⅲ-5 1号土坑〔SK1〕

3号土埴 [SK3] (13図、Ⅲ-2)

遺構 B地区西側に位置し、2号竪穴状遺構と6号溝址との間にある。形態は、長軸(南北)2.18m・東西2.0mを測る不整形円形に、西側で直径0.7m程の円形土埴が重複する。覆土は両者とも若干の炭化物を含む黒褐色砂質土で同一遺構の可能性が高い。掘り込みは西壁10cm前後で、東壁18cmを測り、底面は地形に沿って東へ傾斜する。東側半分の位置から覆土上面に若干の小焼土埴が認められたが、底面からは検出されない。

遺物 土師器片が数点出土しているにすぎず、復元実測可能な個体はない。

5号土埴 [SK5] (10図、Ⅲ-1、17図)

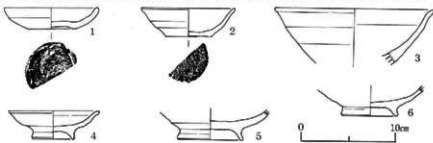
遺構 B地区北西隅部に位置し、1号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では南側半分程を検出したにすぎないが、円形に近い楕円形態になるものと思われる。長軸方向はN30°Wを指し、東西壁間1.2mの規模を推定する。土層断面から東壁の掘り込みは68cm程になり、底面が鍋底状を呈する。覆土には炭化物粒が大量に混入し、上層(VII層)では漆黒色を呈する程であったが、焼土は認められない。

遺物 出土量が多いが、全て破片出土である。器種には、土師器杯(1・2)・碗(3~6)・羽釜、須恵器甕、灰釉陶器碗がある。この遺構も1号住居址と同様に環類を主体とするが、三ヶ月高台を付すものが目立つ。杯・碗とも皿形のもので器高の深いものに大別できる。6の内面はヘラミガキが施こされ、黒色処理される。

6号土埴 [SK6] (16図)

遺構 B地区の東側に位置し、2号住居址(断面)に近接する。形態は2個の柱穴が合体したような不整形円形を呈し、東西80cm・南北62cm・深さ36cmの規模になる。2号住居址に付属する可能性もある。

遺物の出土はなく時代不明である。



17図 5号土埴 [SK5] 出土器実測図(1:4)



Ⅲ-6 1号住居址、5号土埴 [SK5]

1号溝址 (20図、Ⅲ-7、18図)

遺構 A地区の南側を2号・3号溝址とほぼ併行して掘り込まれるが、東西の両端付近が南に屈曲して弧状を呈する。幅0.7m前後・深さ10~20cmの規模で、検出面での溝底比高差は30cm程になる。覆土は灰褐色砂質土で小円礫を多く含む。

遺物 出土量は少なく、全てが小破片出土である。器種には、土師器環・甕・須恵器環・高台付環(18図1)・甕がある。このほかに安山岩製凹石(2)・大型獣骨片が出土している。高台付環は大形のもので奈良時代の所産と考えられるのに対し、他は平安時代に比定される。

2号溝址 (20図、Ⅲ-7、19図)

遺構 A地区の3号溝址と併行する。等高線を縦断するように地形に沿って掘り込まれ、東端付近は2本に分岐し南に屈曲して凹地へ流れ込む流路になる。幅は西端が狭く0.7mを測り、最大幅が1.4mになる。深さは22cm~40cmであり、西端と東端の溝底の比高差が50cm程になる。覆土は黒褐色砂質土であるが、東側に行く程小円礫を多く含む。

遺物 出土量が多いが、全て破片出土で復元実測可能な個体はない。器種には、平安時代に比定される土師器環・甕・碗、須恵器環・高台付環・甕、灰輪陶器碗等がある。土器類の他に輪の羽口片、布目痕を残す瓦片、大型獣骨片が出土している。

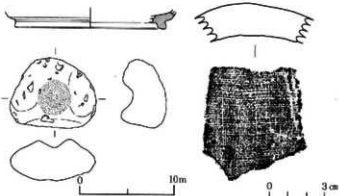
3号溝址 (20図、Ⅲ-7)

遺構 A地区の中央付近に位置し、2号溝址と併行するが、4号・6号溝址と直交する。幅は0.3m~0.7mで、深さ12~40cmを測る。溝底の比高差は西から東に40cm程になる。覆土は他の溝址と異なり灰褐色砂質土である。

遺物 出土量は少なく、全て破片出土で復元実測可能な個体はない。器種には、平安時代の土師器環・碗・須恵器甕のほかに中世陶磁器がある。

4号溝址 (20図、Ⅲ-8)

遺構 A地区の東側に位置し、3号・5号溝址と重複し、2号溝址に接して終結する。南北方向に掘り込まれ、幅1.0m~1.23m・深さ13cmの規模になる。北から南へ溝底の比高差は5cm程である。覆土は黒

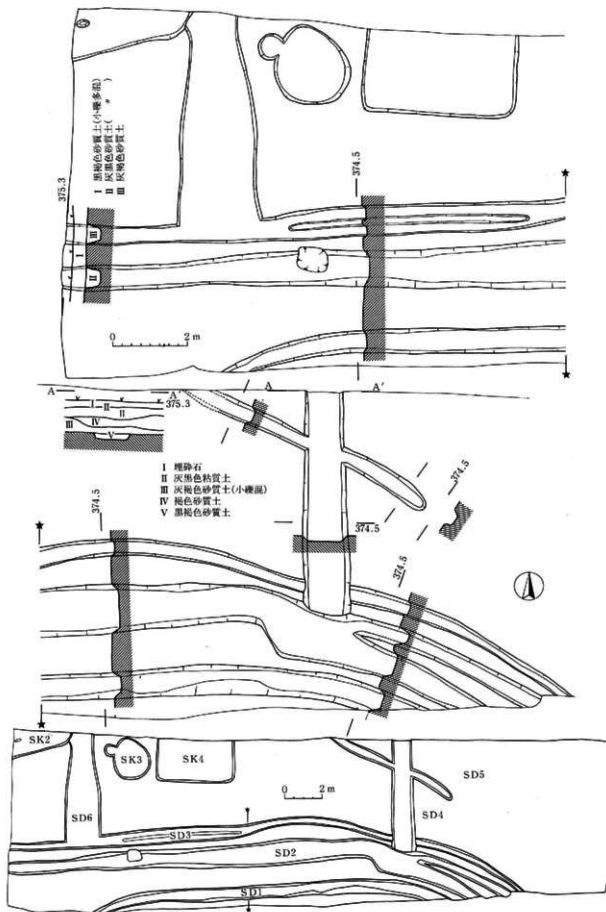


18図 1号溝址出土遺物
実測図(1:4)

19図 2号溝址出土布
目瓦拓影図(1:6)



Ⅲ-7 1号~3号溝址



20图 A地区遺構実測图(上1:40, 下1:100)

褐色砂質土である。

遺物 土師器杯・甕・須恵器甕片が出土しているにすぎない。

5号溝址 (20図、Ⅲ-8)

遺構 A地区の東側に位置し、4号溝址と重複するが、これよりも新しい。幅50cm前後、深さ20cm程の規模になり、覆土は多量の小砂利を包含する黒褐色砂質土である。溝底の比高差は6cmを測る。

遺物の出土はない。



Ⅲ-8 4号・5号溝址

6号溝址 (13・20図)

遺構 A地区の西端付近に位置し、1号竪穴状遺構と重複し、3号溝址に直交して終結する。幅1.3m～2.2m・深さ5～12cmの規模になる。覆土は砂利混り黒褐色砂質土である。

遺物 須恵器蓋片、中世のカワラケ片と推定される土器皿片が出土しているにすぎない。

7号溝址 (21図、Ⅲ-9、22・23図)

遺構 B地区の中央付近に位置する。土層の断面からは表土下灰黄色粘質土層から落ち込む断面幅8m程の大溝の下面に掘り込まれた人工流路と考えられる。流路は2段となるが下段の溝は流水により掘り詰められたものと思われる。流路は北西から南東方向にあり、幅1.9m～2.6m、深さ30cm～50cm規模になる。検出遺構10.7mのうち溝底面の比高差は20cm程である。遺物の出土は上段面の灰黒色砂質土層より多く出土しており、古銭はこのうち中央付近の西壁下より集中して出土した。

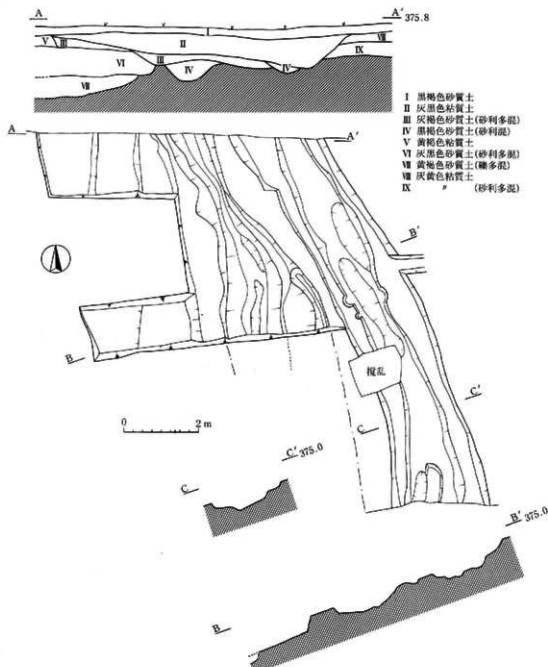
遺物 出土量は少ない。器種には、弥生時代後期の赤彩壺、土師器杯(22図2)・碗(3)・甕(4)、須恵器蓋(1)・甕



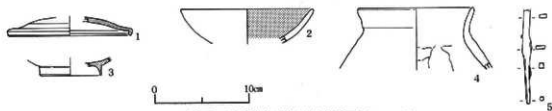
Ⅲ-9 7号溝址

がある。このほか中国北宋銭(23図)が7種9枚、鉄鏝(22図5)が出土している。図示した土師器甕は古墳時代後期に比定される。甕の内面はヘラミガキが施こされ黒色処理される。

8号溝址 (10図, III-10, 24図)



21図 7号・9号溝址実測図 (1:100)



22図 7号溝址出土遺物実測図 (1:4)



23図 7号溝址出土古銭拓本図(1:1)

遺構 B地区の西側に位置し、1号住居址の南壁と重複する。流路は西から南へ弧状を呈するが、A・B地区へ接続せず、この地区に至る前に終結するものと思われる。幅は凹凸があり一定でなく、0.5m～1.24mの規模になる。深さは24cm～32cmを測り、溝底の比高差は15cmである。覆土は小円礫を含む黒褐色砂質土である。1号住居址との重複の関係であろうか溝の中央以北から遺物の出土が多い。

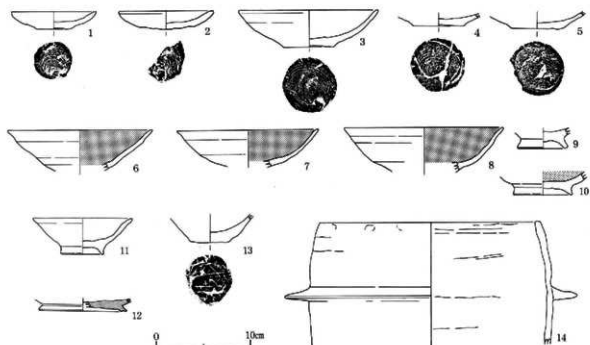
遺物 出土量は比較的多いが、僅んど破片出土である。器種には、土師器杯(24図1～7)・椀(8～11)・甕(13)・羽釜(14)、須恵器杯・高台付杯(2)・甕、灰軸陶器椀等がある。12・13の土器は前時期の所産と考えられる。6～8・10の内面はヘラミカギが施こされ黒色処理される。羽釜は1号住居址から同個体の破片が出土している。



III-10 8号溝址

9号溝址 (21図、III-11)

遺構 B地区の中央付近に位置し、7号溝址と併行するが、覆土には小円礫から頭大の礫が混入していることから大規模な流水の結果と考えられる自然流路であろう。対岸は10号溝址の西壁を想定するが、この間に何回となく流路の変更があったことがうかがえ、明確に分類できない程複雑な土層になる。ちなみに大溝幅25m前後を推定する。



24図 8号溝址出土土器実測図(1:4)



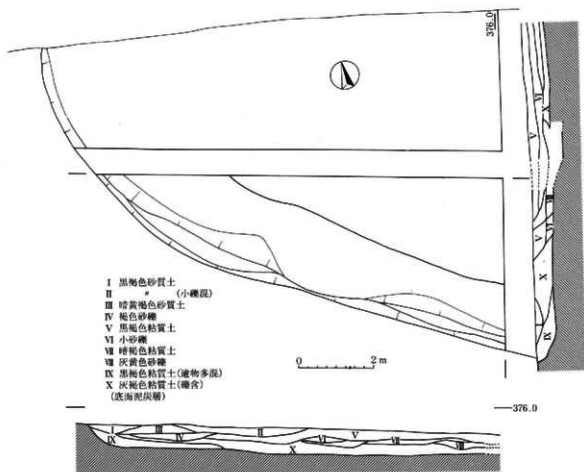
Ⅲ-11 9号溝址

遺物 出土量は少なく、それも小破片出土で復元実測可能な個体はない。器種には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。

10号溝址 (25図、Ⅲ-12、26図)

遺構 C地区の東側大半を占める。流路は東から南西に大きく屈曲する。溝幅は9号溝址まで求められ、東へ行くに従って深くなり、堆積土の中の砂利・礫も多くなる傾向がある。西壁の調査では、壁が緩い曲線を描くような落ち込みになり、壁から2m奥まった所から厚さ5cm程の泥炭層が認められた。遺物は溝全体に散在していたが、溝西縁をめぐる最上層のI層と最初に埋まったIX層からの出土が目立つ。

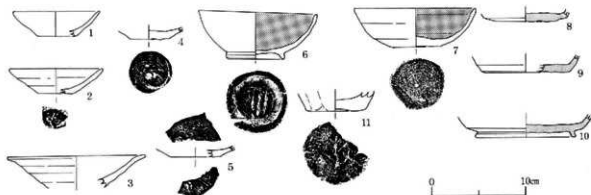
遺物 出土量は比較的多いが、小破片が目立つ。器種には、土師器杯(26図1~5・7)・甕(11)・碗(6)、須恵器杯(8・9)・高台付杯(10)・甕、灰釉陶器碗等がある。6・7の内面はヘラミガキが施こされ黒色処理される。5の内面には竹管による円形刺突文が、外面には糸切痕が残る。11の底部外面に木葉痕を残す。古墳時代の所産であろう。I・IX層出土のものには摩耗を受けているものは少ない。近位置からもたらされたものと



25圖 10号溝址実測図 (1:100)



III-12 10号溝址



26図 10号溝址出土土器実測図(1:4)

考えられる。またⅠ・Ⅱ層土器の取り上げ分離することなく整理してしまったため新旧時間差を求めることは困難であるが、土器自体は平安時代に比定することは可能で、10号溝址西壁側の埋没は短時間のうちになされ、溝本体は除々に東へ移行するようである。ちなみに7の内黒環は、東西断面の中央Ⅳ層下部の砂利層から出土したもので、完形に近い状態で出土した。

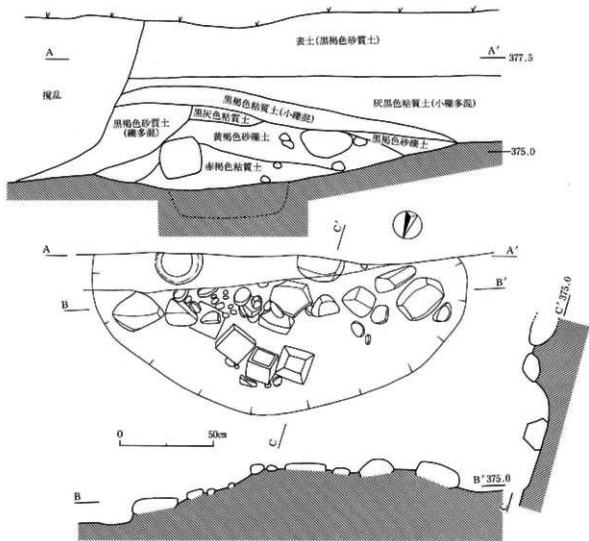
五輪塔埋納遺構 (27~30図、Ⅲ-13~15)

上部集石 C地区西端南壁下であり、調査ではほぼ半分程を検出した。五輪塔を集積した上に大小の円礫を多く混入する黄褐色砂質土等で覆った後、更に小礫混りの黒褐色粘質土を盛る。土盛の規模は不明であるが、高さ40cm・長軸(東西)2.5m程の楕円形を呈する土製頭形を推定する。

五輪塔中位集積 東西2m・南北推定1.5m・深さ4cm程を楕円形に掘り回め、下部の五輪塔埋納遺構に規制されるがほぼ同じレベルに西から火輪・地輪が、更に東側から水輪が少し浮いた状態で検出された(27図)。もとは下部の水輪の上に据え置かれたものが土盛の段階で北側へすべり落ちたような出土状態を呈し、雑な埋納ともいえる。



Ⅲ-13 五輪塔埋納遺構上部集石



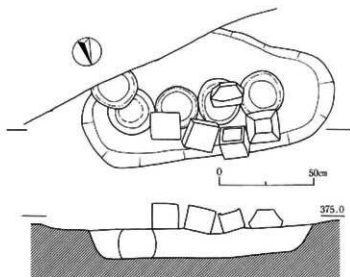
27圖 五輪塔埋納遺構上部集石・土層實測圖 (1:20)



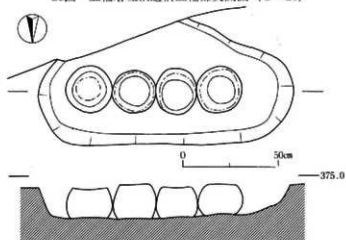
III-14 五輪塔埋納遺構五輪塔部

五輪塔下部集積 不整形円形を呈し、水輪のみ4個東西に並べた遺構である。小円礫を含む暗黄褐色砂質土層から掘り込まれ、北壁が直線的であるのに対し、南壁は南東方向に張り出す。長軸(東西)1.35m・検出面での南北幅0.68m・深さ16cmの規模になる。4個の水輪はほぼ中央に相接して据え置かれている。

五輪塔埋納遺構の性格 本来五輪塔は、地上にあるにせよ、埋納設置されるにせよ下から地輪、水輪、火輪、空・風輪と組み立て塔にするのが通常の変である。ところが本遺構では、下部に水輪のみ据え置き、その上部に火輪2個、地輪3個、水輪1個(1半着手の際水輪1個が発見されている)が置かれるが、地輪が上位に来るなど本来の組合せになっていない。また最上部に位置する空・風輪を欠いており、原位置での埋納遺構とは考えられない。いつの時代か不明であるが、何らかの都合により原位置より離れて再埋納された可能性が強い。ちなみに石材は安山岩を使用しており、梵字が刻まれた地輪を除く他のは粗雑な作りである。火輪の屋根形勾配等から室町時代以降の所産と考えられる。



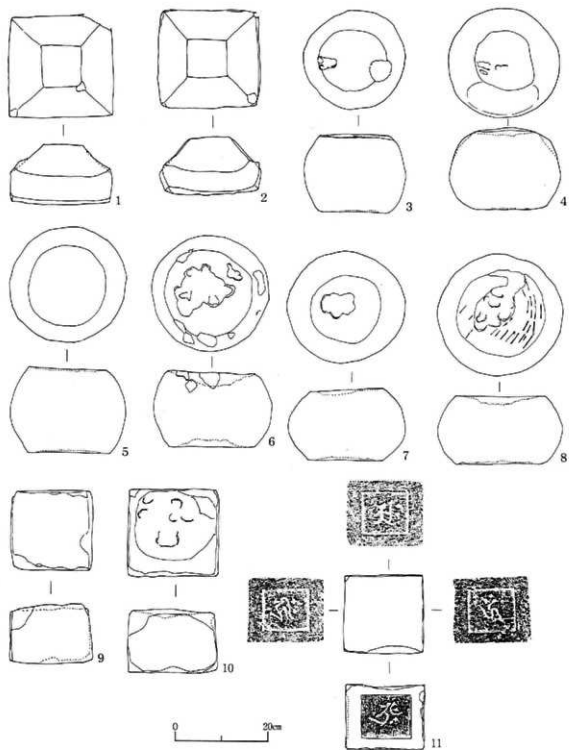
28図 五輪塔埋納遺構五輪部実測図(1:20)



29図 五輪塔埋納遺構下部実測図(1:20)



III-15 五輪塔埋納下部遺構



30図 五輪塔実測図 (1 : 8)

火輪 (1・2) 水輪 (3~8) 地輪 (9~11)

五輪塔埋納遺構中位集積地出土 (1~3・9~11) 下部土坑出土 (5~8) 表採 (4)

11の地輪の4面は掘り凹め、梵字を配する。大日如来胎藏界五仏のうち東方「ア」南方「アー」西方「アン」北方「アク」を表現している。

IV 結 語

三輪遺跡の調査は、市街地の中を点在する形で4地点を数えるようになった。この中で三輪小学校地点から本郷団地地点の東西間の遺跡のあり方がようやく垣間見ることが出来るようになってきたように思う。今回の調査地における窪地を境に微地形が大別され、それぞれの微高地上に弥生時代後期、古墳時代の小単位の集落が形成され、平安時代に至り両微高地上全体に点在するようになる。B・C地区の9号・10号の大溝址からの出土遺物は、平安時代を主体とするものでこれを裏付けよう。ただ、南北方向の展開については今後の調査に待つ所が大きく、東西間においても詳細な内容については同様なことが言える。

今回の調査結果から三輪遺跡4)の性格を考えてみたい。遺物からは弥生時代後期から中世に至る資料が見い出されるが、奈良時代以前のものは各時期とも少量の出土にすぎなく、平安時代以降のものを主体とする。ことほどさように遺構においても今回の調査では、平安時代以降の所産と推定されるものが多い。検出遺構の総数は、住居址2軒・堅穴状遺構2基・柱穴列1ヶ所・柱穴群1ヶ所・土坑4基・溝址10本である。このうち遺物等から平安時代に比定されるものは、1号住居址、1号堅穴状遺構、柱穴群、5号土坑、1号・2号・4号・5号・9号・10号溝址があり、中世以降の所産と考えられるものに3号・6号・7号溝址、五輪塔埋納遺構があり、他は時代時期不明である。更にこれらの遺構を詳細に検討すると、積極的に居住遺構であるとの判断を下す材料が乏しい。住居址・堅穴状遺構では、カマド及び焼土等の検出はなく、また柱穴列・柱穴群では建物址を想定するも小規模なものになり、居住施設として考えるには疑問が残る。ただ1号住居址の東壁の掘り込みや床面の状態、覆土及び出土遺物等から住居址と見て間違いないものと思われる。また、1号・3号土坑からは焼土が、5号土坑では多量の炭化物が確認されていることは、何らかの然焼を伴う人為的行為があったことをうかがわせ、今回の調査地は各遺構及び周辺から少量ながらも遺物が確認されている点を考慮すれば、主体的居住域ではないが外縁の関連遺構と考えられる。次に溝址の性格について考えてみたい。現地表面の地形は、南東方向へ傾斜して窪地化しており、調査所見からも9号・10号溝址のような大溝が検出され、古くからの地形と判断される。これらの大溝は遺物等の観察から平安時代に形成され、未葉には度重なる鉄砲水様の出水により埋没してしまうようである。この大溝内の平安時代末葉に位置する1号住居址、5号土坑、8号溝址の存在は埋没時期を決する資料であり、現在の地形が主として平安時代以降に形成されたことを裏付ける。また、9号溝址最下層まで調査したわけではなく、大小円礫の包含が多いことから平安時代以前からの自然流の積み重ねによるものとの考えが強い。しかし、10号溝址の西壁にみられる埋没状況から人工的に掘削されたものが、東壁を序々に削り取り流路を東へ変更し、最終的に洪水により埋没した可能性も捨て切れない。7号溝址は大溝の埋没後、何らかの必要に応じ中世に至って人工的に掘削されたものと考えられる。A地区の1号～3号溝址は、等高線を縦断するように流下する溝で、微高地上の居住域からの排水路と考えられ、2号溝址の埋没後3号溝址が形成されたものと思われる。4号～6号・8号溝址は幅広く浅いものであり、人工的なものと考えられるか、用途は不明である。

また、今回の調査で検出した五輪塔埋納遺構は二次的なものと思料され、初源の埋納遺構でないのは残念であるが、三輪遺跡3)で確認された中世遺構・遺物の関与も考えられ、近隣に中世信仰遺跡の存在が推定される。ちなみにA地区南東隅にあった防火水槽掘削の折にも五輪塔が出土したという。

以上、三輪遺跡4)の調査を瞥見したが、調査区域が点としての存在であることに気づき、まだ多くの解明すべき問題を含んでいる調査地点でもあると言える。

(付) 遺物 観察表

番号	種別	器種	法量			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
1号住居址 (11箇)							
1	土師	坏(皿)	10.3	3.4	1.8	1/6	ロクロ・糸切り
2	#	#	12.4	4.7	3.0	4/5	#・#
3	#	#	15.4			1/4	#
4	#	#	14.1			1/2	#・ヘラミガキ
5	#	#	15.4			1/4	#・糸切り
6	#	#	15.3	6.4	3.7	3/4	#・#
7	#	#	16.4	5.5	5.0	1/2	#・# ・ヘラミガキ
8	#	#	15.2	5.8	5.4	1/4	#・#・内黒
5号土址 (17箇)							
1	土師	坏(皿)	10.0	5.0	2.2	1/4	ロクロ・糸切り
2	#	#	10.0	5.0	3.0	1/4	#・#
3	#	輪	17.0			1/4	#・#
4	#	#	9.5	4.5	3.0	1/4	#・#
5	#	#		6.8			#・#
6	#	#		6.0			#・#・内黒
1号溝址 (18箇)							
1	須恵	高付坏	16.0			1/8	ロクロ・ヘラケズリ
2	石製品	圓石					安山岩製
2号溝址 (19箇)							
1	須恵	丸瓦					布目圧痕
7号溝址 (22箇)							
1	須恵	蓋	13.2			1/8	ロクロ・ヘラケズリ
2	土師	坏	14.0			1/7	#・内黒
3	灰釉	輪		6.8		1/5	ロクロ
4	土師	甕	12.4			1/4	ヘラナデ
5	鉄製品	鉄鏝					先端欠損
8号溝址 (24箇)							
1	土師	坏(皿)	9.0	4.0	1.9	1/2	ロクロ・糸切り
2	#	#	10.0	4.0	2.0	1/3	#・#
3	#	#	14.8	5.4	4.0	1/4	#・#
4	#	#		5.6			#・#
5	#	#		5.8			#・#
6	#	#	15.4			1/5	#・内黒
7	土師	坏	15.0			1/8	ロクロ・内黒
8	#	輪		5.6			#・#
9	#	#		5.4			#・糸切り
10	#	#		3.2			#・#・内黒
11	#	#	10.5	4.7	3.8	1/4	ロクロ・# ・ヘラミガキ
12	須恵	高付坏	9.2			1/2	#・ヘラケズリ
13	土師	甕	4.0				ヘラナデ
14	#	羽釜				1/6	ナデ
10号溝址 (26箇)							
1	土師	坏	9.4	4.0	2.7	1/7	ロクロ
2	#	#	10.0	4.9	2.6	1/5	#・糸切り
3	#	#	15.0			1/7	#
4	#	#		4.3			#・#
5	#	#		5.5			#・# ・内面凹形刺突文
6	#	輪	12.5	6.2	5.0	1/8	#・# ・のちヘラナデ ・内黒
7	#	坏	13.0	5.0	4.0	2/3	#・#・内黒
8	須恵	#		9.0			#・#
9	#	#		9.4		1/3	#・#
10	#	高付坏	10.5				#・#
11	土師	甕		6.4		2/3	ヘラナデ・木炭痕
五輪塔埋納遺構 (30箇)							
番号	種別	器種	最大幅 (径)	上近幅 (径)	高さ	出土位置	
1	石製品	火輪	22.0	8.1	13.0	中位集積地	
2	#	#	22.0	8.3	12.2	#	
3	#	水輪	22.0	15.0	16.8	#	
4	#	#	24.2	13.5	17.6	表探	
5	#	#	24.8	16.4	18.7	下部土底	
6	#	#	25.2	18.8	16.8	#	
7	#	#	25.2	15.2	15.6	#	
8	#	#	27.1	19.5	14.8	#	
9	#	地輪	17.8	16.4	12.7	中位集積地	
10	#	#	19.4	18.8	14.0	#	
11	#	#	17.2	-	14.4	#	

長野市の埋蔵文化財

- 第1集『信濃長原古墳群』
第2集『浅川西条』
第3集『中村遺跡』
第4集『塩崎遺跡群』
第5集『塩崎遺跡群(2)』
第6集『三輪遺跡-付木内坐-元神社遺跡』
第7集『田中沖遺跡』
第8集『篠ノ井遺跡群』
第9集『四ツ屋遺跡(第1~3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
第12集『浅川扇状地遺跡群-平礼バイパスA・E地点遺跡-』
第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
第15集『箱清水遺跡(2)』
第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
第17集『浅川扇状地遺跡群-平礼バイパスB・C・D地点-』
第18集『塩崎遺跡群VI-市道松節小田井神社地点遺跡-』
第19集『土口將軍塚古墳-重要遺跡確認緊急調査-』
第20集『三輪遺跡(2)』
第21集『芹田小学校遺跡』
第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』
第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』
第24集『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
第25集『南川向遺跡』
第26集『東番場遺跡』
第27集『小柴見城跡』
第28集『宮崎遺跡』
第29集『浅川堀遺跡』
第30集『地附山古墳群』
第31集『町川田遺跡』
第32集『中条遺跡』
第33集『輪前遺跡・塩崎城跡』
第34集『石川条里遺跡(4)』
第35集『篠ノ井遺跡群II』
第36集『屋地遺跡II』
第37集『篠ノ井遺跡群III』
第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
第40集『松原遺跡』
第41集『小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・塩田遺跡』
第42集『田中沖遺跡(2)』
第43集『南宮遺跡』
第44集『塩崎遺跡群(7)』
第45集『石川条里遺跡(6)』
第46集『篠ノ井遺跡群(4)』
第47集『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』
第48集『小島柳原遺跡群中俣遺跡II』

長野市の埋蔵文化財第49集

三輪遺跡(4)

平成5年3月10日 印刷

平成5年3月15日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 奥山印刷工業株式会社